

令和3年11月吉日

「誰も置き去りにしないエコハウス」を目指して

～合言葉は“ファブリック・ファースト”～

この度は日独交流160周年記念および、横浜市フランクフルト市パートナー都市10周年記念に際しまして、記念講演での登壇の機会を頂き、誠に光栄に思います。2009年の自らの帰国以来、環境問題は人権問題であることを、念仏のごとく唱えて参りました。誰も置き去りにされない社会の実現のために、建築部門の徹底的な省エネは待った無しの様相となっており、施主・施工・設計が丸となってこれに取り組む必要性は明らかです。私が20代の頃のドイツ滞在を通じて体得させてもらったの事の中で、恐らく一番価値があったのは、「目的がブレなければ、乗り越えるべき課題は明らかにしやすい」ということ。かけられる時間は有限だという感覚と、ブレない目的意識があれば、今何を一番優先すべきかがおのずと見えてくるということ、現地の多くの方が実践で示してくれたことだったと感じています。まさに常に自分の行動のプライオリティを見極めながら行動する、【prioritize】というワークが自分の中に芽生えたきっかけでした。しかしながら気候危機は、もはや取り返しのつかないステージへと突入しており、私達の努力が果たして報われるのかどうか、残念ながら判らなくなってきました。それでも私達には他の選択肢（例えば「命の選別」といった非人道的なもの）など論外であることは、皆さんにもご理解頂けるでしょう。一方、現時点でもいわゆる「高断熱高气密」と呼ばれる、建築における外皮強化に関して、実務者の間ではまだまだ多くの誤解があると感じております。「日本の高温多湿な気候に適しているのか?」、「窓を開けられない建築など如何なものか?」、「通風が見込めればそもそも冷房行為は不要では?」、「日本の冬に断熱は重要ではない」等々、外気の温湿度やエネルギー消費量に関する定量化とそれに基づく考察がなされぬまま、そして快適性の定義も曖昧なまま、建設的とは言い難い議論が延々と繰り返されています。本セミナーにご参加くださる実務者の皆さんには、省エネというプライオリティをしっかりと認識した上で、先ずはこのような誤解を解いていただければ本望です。欧米では建築のカーボンニュートラル化にあたり、太陽光等の再生可能エネルギーの搭載に先立ち、徹底した外皮強化により省エネを計ると同時にこれまで以上の快適性、健康メリットを実現する手法が推奨されています。これを“fabric first（外皮優先）”と呼び、その最高峰に君臨するのがパッシブハウス基準と言っても他言では無いでしょう。当日は新築だけでなく、リノベーション事例もご紹介する予定でおります。どうぞ楽しみに・・・。

独・バーデンビュルテンベルク州公認建築士

一般社団法人パッシブハウス・ジャパン代表理事

キーアーキテクト株式会社代表取締役

森 みわ

